

〈新刊紹介〉

野宗睦夫著 高校国語教育

— 実践報告 —

この書物は表題の示す通り、わが長友野宗君が広島県立尾道東高校（現在三原高校に転任）に在任中、渾身の情熱をこめて清進したほぼ十ヶ年間の、国語教育に関する実践報告の清粋ともいふべきものである。

元來、この種の実践報告というものは、一見いかにも簡単にまとめられるかのように見えながらも、その実、きわめて書きあらわしにくいものである。その最も大きい要因は、実践報告という形式をとる場合、その素材となるものが、常に報告者自身の行動に密着し、限定されるという点にあるからなのであると思う。従って、著者自身の過去の行動を材料にした報告は、常にある種の告白体をとることを余儀なくされる。ところで、その告白という行為も、一人の人間が、自己を他者としてありのままに表現するということではあるが、ことはそう簡単には運ばない。今ここで告白についての所論を展開する余裕はないが、とにかく告白という行動には、常に「私情」がつきまとう。しかも、そ

の「私情」が消極的に働く場合には、泣きことなり、愚痴ともなるし、積極的な形をとる場合には、増上慢にまで発展する。

けれども、本書の著者は、それらいくつかの困難を自覚しつつ、「自分の古い傷を今さらさらけだしてどうなるという思いにたえずかられ」ながらも、敢えてこの書物を公けにした。一体その理由は何であったのか。この著者の心の奥底に「チャチな先生にはなりたくない。」「文学青年のなれの果てとしての国語教師にはなりたくない。」という強い念願のあったことを、私は見逃すわけにはいかない。この激しい願いから発した次のようなことは、「一日の埒をすぞす学校の生活を大切にすること。それを『生きるささえ』にすること。」（あとがき）という教育者としての強烈な魂の叫びが結晶して、この立派な書物を公刊させる動機となり、理由ともなったことを、本書の中から先ず読みとりたいと思う。

内容の紹介に移ろう。「もくじ」は次の通りである。

まえがき

Ⅰ 指導計画

1 労働時間

2 指導計画の反省

3 国語甲の実践報告

4 生徒による評価

Ⅱ 古典教育

1 古典の学習指導

2 源氏物語

3 枕草子

4 徒然草（その一）

5 徒然草（その二）

Ⅲ 文学教育

1 小説の学習指導方法

2 人物の好きさらい調査

3 教材研究——中島敦「李陵」

4 単元「郷土と文学」

Ⅳ 作文教育

1 書くことの指導

2 作文における表現のあやまり

3 作文の評価

あとがき

事項索引

教材単元索引

人名 書名 出版社索引

これによっても本書の概要はつかめるかとも思うが、私が特に注目したいと思う部分は

Ⅰの3、5、Ⅱの3、4、Ⅳである。

古典教育の実践にあたって、先ず最初に著者を苦しめた根本的な問題は、現代に生きる若人たちに、日本の古典を「いかに面白く教えるか」という疑問であり、「口語訳の次に何をつかませるか」（五八頁）ということがらであった。この困難な問題を自身に課した著者は、その解決策の第一の手がかりを、指導目標の明確化という点においた。（五七頁～六〇頁）次に、その目標を基本として、実際の教室における学習指導の方法に、できるかぎりの工夫、改善を加えようと考え、その方向に余力を傾注しようと試みている。その典型的な事例は、Ⅰの3枕草子の項を見れば明白である。

著者の扱った部分は、1春は曙（一段）2うつくしきもの（百四十六段）3虫は（四十一段）4世の中に（二百五十二段）5賀茂へ参る道（二百十三段）6八月晦日（二百十四段）7香炳峰の雪（二百八十三段）8翁丸（七段）であるが、その文章の要旨を、1については（作者の）自然の見方、2は美意識、3については感受性、4は人間の見方、5・6は農民の見方、7は有名なエピソード

の真意、8では説話としての面白さ——という風到的確に把握し、指導の中心目標をそこに設定する。

更に、現場における学習の展開方法については、例えば、2の部分では、生徒の感想文を指導方法の中心材料としてとり入れ、5においては、生徒の理解困難と思われる問題点を鮮明にさせ、6では、再び「滑少納言の農民に対する態度について」の作文を書かせて、その代表的なものをプリントにし、その内容の検討、誤字改めの材料に使用。8については、読み及び語句解釈の徹底した指導、板書を用いての係結びのきまりに関する効果的な教示。おまけに、全体を終了した後の生徒の興味、受け取り方の調査等々、およそ工夫出来ると思われる様々な方法を、縦横無尽に駆使しての指導ぶりには、只々賛嘆の辞を呈するばかりである。

なおこの他に、Ⅰの5における古典学習指導体系化の試みや、Ⅲの3中島敦著「李陵」における周到綿密な教材研究の態度、Ⅳの4における郷土に関する文学作品との熱心な取り組み方、Ⅴに見られる着実な作文指導の歩み等、まだまだ触れておきたいことからは、

山積しているけれども、今ここで多くを語るゆとりはない。ただ、自らの授業方法に行きづまりを感じ、マンネリズムにおちいろうとする指導形態に憂いを抱きつつ国語教育の第一線に立っている指導者、はたまた、若き情熱をこれからの国語教育のために捧げようとする人々等にも、とにかく本書の一説を是非勧めたいと考えるのみである。

（昭和三十九年四月十日発行 A5判本文
二六〇ページ 事項索引六ページ 教材単
元索引七ページ 人名 書名 出版社索引
四ページ 非売品）

〔眞嶋恒雄〕